部活動、勝利至上主義から脱却へ

NEWS インサイド

勝利のみを価値付ける「勝利至上主義」からの脱却が求められている運動部活動。スポーツ指導の在り方が変化しつつある。今後、スポーツ指導、運動部活動はどうあるべきか。2人の識者に話を聞いた。

「レク志向」のニーズもくんで

山本明　日本バスケットボール協会強化育成グループ育成セクションシニアマネージャー

勝利至上主義の大きな要因に指導者の承認欲求があると思います。試合に勝つことで自分の名を上げたい。勝たないと注目が集まらないので、子どもが勝つための道具になっている場合もあります。

背景には先生が上で生徒が下、という日本の教育文化があるのではないかと思います。体罰は「愛のムチ」という風潮も以前までありました。指導者だけでなく、保護者も自身の経験から体罰を肯定する人もいます。

勝利至上主義を変えるために怒った指導者にペナルティーを与えるなどは対症療法でしかなく、考え方を改めていくしかありません。バスケットボールでは、審判は暴言などにテクニカル・ファウルを宣告できますが、「ファウルを取られなければいい」「練習ではやる」だと根本的に変わりません。

勝利至上主義は、子どもではなく、指導者が主体になってしまっています。誰のために指導するのかを指導者自身が気付き、変わることが必要です。子どもたちは言われた通りに頑張っているだけです。大人が変わっていかないといけません。

勝利以外の価値もあると考え方を変えることも必要です。ただし、負けてもいいということではありません。勝利を目指して頑張るのは、あってしかるべきです。ただ、将来を見据えて子どもたちを育てるということが、とても大事なことです。

大会で優勝できなかったとしても、練習や練習試合など、一生懸命やってきた日々に価値があります。

スポーツには、競技志向とレクリエーション志向の二つがあります。例えば、公立の中学校には小学生の頃からその競技をプレーしていた選手もいれば、友達に誘われたから入部した選手など、さまざまな選手がいます。

そこに指導者が競技志向を押し付けるパターンが多いのです。個々の子どもたちのニーズに合わせて、大人が子どもたちのニーズをくんで、それに合った指導をしていくことが重要です。プレーが上手ではないがプレーしたいという子どもたちが、家の近くで、あまりお金をかけずにバスケットボールをできる場所ができるのが理想です。

バスケットボール界ではリーグ戦の大会を始めました。負けても試合ができること、同程度のレベル同士で拮抗した試合をできる点などが良い点です。日程調整などが課題ですが、大人の知恵で工夫すればできます。

子どもたちのニーズはさまざまです。大人の都合ではなく子ども中心で考えていった方がいい未来があると思います。

大会を制限する指針が必要

溝口紀子　日本女子体育大学教授　バルセロナ五輪女子柔道銀メダリスト

子どものスポーツが先鋭化、過激化しています。柔道の場合、平成16年に小学生の個人戦全国大会が開かれて以降、風向きが変わりました。指導者の体罰や、無理な減量といった話も出てきました。

地域格差や経済格差が広がる中、お金を費やせば成績が上がるというところで激化している面もあります。

一方で、機会がない子どもたちはスポーツから離れていき、スポーツ界全体のピラミッドは小さくなっていきます。勝利のためにはお金も手段もいとわないとなると、保護者も疲弊してしまうのです。

中学校、高校では、進路に影響するので、さらに過激です。どの競技も私立が強い傾向にあります。私立の場合は少子化の影響で、受験する生徒の確保競争が激化しています。公立学校でも再編整備が進む中、私学は受験者が欲しいのです。

スポーツ強豪校になると部員が集まるので定員確保が楽になります。そうなると、部活の指導者が理事長や校長よりも立場が上になって、何も言えなくなってしまうこともあります。多少の体罰は構わないので強くしてくれ、という閉鎖的な組織になってしまうこともあります。

公立でも、市立高校では教員の異動が少なく、長い間同じ学校に勤務することが多くなり、長年指導者が変わりません。スポーツ指導者が「名士」になると何も言えなくなり、OB会などが辞めさせないこともあります。自浄作用がない中で子どもが暴力を受けるようになります。

団体競技の場合、メンバーに選ばれなければ推薦をもらえません。いくらいい選手でも、選ばれなければチャンスが乏しくなります。個人競技よりも、そのような圧力は強いようです。

勝利至上主義の根っこにあるのは小学生、児童の部分です。未発達の子どもたちの人権を守るためにも、大会を制限する指針を作らなければいけません。

中学校では地域移行が進められますが、民間への補助金などの仕組みを作って、部活を学校から切り離した方がいいと思います。また、競技志向以外にもさまざまな形があります。学校から切り離していかないと、そういう文化が熟成されていきません。

中学校、高校共にとにかく指針がありません。練習時間の制限など、競技間横断的なものがないのです。指針を作って、厳罰化していくことも大事になっていきます。

柔道では、進学校対象の大会も行っています。出場する学校は今までなら、ほぼ全国大会に出られないようなところです。

全国で一番を目指すだけでない、付加価値があったり、新しい価値を見いだすような大会もやっていくことも面白いと思います。